



キャンパス・コラム

フェルマーの最終定理

アンドリュー少年が、フェルマーの最終定理にであったのは、10歳のときだ。町の図書館で、たまたま見つけ魂を奪われた。350年前フェルマーが、証明したが余白が足りず書けないといった伝説の予想(証明されれば「定理」)である。

少年は、この定理を絶対に証明するとかたくなに決める。数学者への道を順調に進み、大学院で専門を決めるとき、しかし、指導教授に勧められたのは、フェルマーの定理とは無縁の楕円曲線論だった。すぐれた数学の才能が、フェルマーにとりつかれて何の業績もあげずに一生を終えるのを、教授は危惧したのかもしれない。フェルマーの最終定理という高き峰の麓には、死屍が累々だからだ。ところが、奇跡が起こる。楕円曲線論のなかの谷山=志村予想という未解決問題を証明することが、そのままフェルマーの定理の証明であることが判明した。

アンドリュー・ワイルズは、自分が生まれて

きた意味(「運命」というやつだ)に身が震えたにちがいない。その後7年間、ワイルズは、フェルマーの最終定理と家族のこと以外は、一切何も考えなかった。パーティにも学会にも顔をださず、自宅の屋根裏部屋で、しゃにむにフェルマーに挑みつづけた。専門外の分野を一から身につけ、まったく新しい数学のジャンルを自ら創りだす。泥沼の戦いはつづき、ついにその日が来る。20世紀中には、とても無理だろうと言われていたフェルマーの最終定理の証明が、1993年6月ひとりの細身のイギリス人によってなされたのだ。ところが、長い証明の一部にミスが見つかる。だが、それも一年半後ワイルズの手によって見事克服された。夢を実現したアンドリュー少年は、数学史に巨大な足跡を刻みつけたのだ。

……といったことが、今度文庫になった『フェルマーの最終定理』(サイモン・シン著、新潮文庫)に活写されている。自死した若き天才谷山豊の話も秀逸。数学者は、本当にとてつもなく美しい。

広報委員 中村昇(文学部教授)